

日本児童文学大系

童心文学の開花

責任編集

猪野省三・菅 忠道
熊谷 孝・関 英雄
巖谷 栄二

三一書房

第二卷

童心文学の開花

刊行のことば

日本に近代的な児童文学が芽ばえた巖谷小波の時代からは半世紀をはるかに越えていますが、それは世界名作の再話や翻訳など移植文学を主流とする歴史であったと、よくいわれています。でも日本の土壌に創造的な成果がみえなかったわけではありません。人生の深い象徴をこめた小川未明の童話や、子供の感覚をいきいきとたいあげた北原白秋の童謡をはじめ、世界の水準に照しても珠玉の輝きを放つ数多くの作品をあげることができます。ところが今日までこうした成果を集大成し、埋もれたものを掘りおこして、歴史の流れに位置づけてみるという仕事は、ほとんど放置されたままでした。

児童文学の意義や役割には重い責任がかけられながら、社会的にはむくいられることのうすかったのが、日本児童文学と児童文学者の立場でした。この根底には、子供の人権を正當に認めなかった児童観が横たわっています。児童文学者は同時に子供の社会的な代弁者として、苦難のたたかひをつづけてきたのでした。それなのに、いま、日本の児童文学は、子供たちから背をむけられるという深刻な矛盾に直面しています。こどもの心をとらえているのは、漫画・絵物語に代表される通俗的な娯楽読物でありくちびるにうたわれるのは卑俗な流行歌です。むしろまれていく子どもの魂を心配して、両親や教師たちのあいだには、児童文学への高い関心がわき起っています。日本の児童文学が今日のように、国民の

きびしい批判と高い期待のまえに立たされたことは、かつてなかったことです。これまで民主的芸術的な児童文学としてたどってきた道を、子供のための国民文学の創造というひろい展望のなかで、見なおさぬわけにはいなくなっているのです。そのためにも、民謡の再評価をはじめ児童文学の源流にさかのぼっての再検討や近代以降の児童文学について達成と欠陥を根本的に考えなおす必要に迫られています。また、一方、子供たちの人間形成における文学の働きをめぐって、文学教育の課題と方法とを理論的にも実践的にも明らかにしなければならないわけです。

こうした要請にこたえて、ここに「日本児童文学大系」全六巻を刊行することになりました。日本の児童文学のエッセンスを集めたこの大系には、日本の子どもたちの生活、よろこび、かなしみ、いかり、夢が、それぞれの時代の特色にいろいろながらいきいきと描きだされています。それは子ども自身のものであるとともに、子どもの心の真実にふれたいと思うすべての親、すべての教師のためのものでもあります。

一九五五年五月一日

猪野省三	巖谷栄二	菅忠道	熊谷孝	関英雄
------	------	-----	-----	-----

凡 例

一、収載作品は、できるだけ初出の原典（新聞・雑誌など）によることにした。

二、収載に当って、かなづかいは現代かなづかいに、用字は教育漢字を主にした当用漢字まじりに書き改めた。ただし、作品の題名は、原則として初出の表記に従った。

三、収載作品の配列は、（一）童話・小説・児童劇・学校劇、（二）童謡・詩、（三）評論・声明書（運動方針書・アピールを含む）の各ジャンル別にまとめた。

四、各ジャンル内での作品の配列は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月日順によった場合もある。

第二卷 目次

I 童話・小説・劇

幼きものに……………	島崎藤村……………	五
黒い旗物語……………	小川未明……………	三
こがねの稲たば……………	浜田広介……………	四
世界同盟……………	江口千代……………	三
天の岩屋……………	鈴木三重吉……………	六
納豆合戦……………	菊池寛……………	六
みそさざい……………	浜田広介……………	六
仏陀の戦争……………	秋田雨雀……………	三
鳩と鴛……………	武者小路実篤……………	九
すずめのお医者……………	斎田喬……………	六
いつまでもつづくお話……………	坪内逍遙……………	二九
溺れかけた兄弟……………	有島武郎……………	二六

名画のたましい	山内秋生	二二六
おもちゃの蝙蝠	佐藤春夫	二四一
王様のなげき	宇野浩二	二四四
峠	土田耕平	二五五
一夜の宿	山村暮鳥	二六三
注文の多い料理店	宮沢賢治	二七〇
青い鉦	小川未明	二七九
白	芥川龍之介	二八七
奉公人の見た夢	和馬泰三	二九二
弟子入り	沖野岩三郎	二九九
梟と幸吉	吉田絃二郎	三〇七
虎ちゃんの日記	千葉省三	三三七
二つの生活	奈街三郎	三五六
与謝の海霞の織混ぜ	与謝野昌子	三六四
北海の波に浚われた蛾	小川未明	三七三
てんぐ笑い	豊島与志雄	三八一

II 童謡・詩

熊野浦……………有本芳水…元三

青き鳥……………有本芳水…元四

古城のほとり……………有本芳水…元五

りす、りす、こりす……………北原白秋…元五

毛虫とり……………三木露風…元六

薔薇……………西条八十…元七

赤い鳥、小鳥……………北原白秋…元七

浜千鳥……………鹿島嶋秋…元八

しじゅうがら……………浜田広介…元九

四丁目の犬……………野口雨情…元九

はだか……………若山牧水…元〇

十五夜お月さん……………野口雨情…元〇

犬と雲……………西条八十…元一

めえめえこやぎ……………藤森秀天…元三

鈴蘭の唄……………山村暮鳥…元三

水	夏	山	ね	か	ゆ	冬	お	草	葱	新	木	つ	船	七	こ	麦
			こ	え	ー	の	み		坊	入	び	く	の	っ	ん	搗
			ね	ろ	べ	朝	や					し	灯	の	小	
			こ	か	見	の						ん		子	山	き
				え	た	唄	げ	野	生	生	き	ぼ			の	
口		家	楊	と	夢											
.....																
巽	佐藤よしみ	島田忠夫	野口雨情	北原白秋	水谷まさる	西条八十	河井醉茗	島木赤彦	島木赤彦	北原白秋	白鳥省吾	西条八十	相馬御風	野口雨情	北原白秋	山村暮鳥
聖歌	三五	三四	三四	三三	三二	三二	三一	三一	三九	三八	三七	三七	三〇六	三〇五	三〇五	三〇三

い	っ	ぼ	ん	道		与田準一	三六
冬	だ	ん	べ			島木赤彦	三七
狐	の	提	灯			野口雨情	三八
門						西条八十	三八
夢	見	花				葛原 幽	三九
星						平林武雄	三〇
村	の	桜				島田忠夫	三〇
花	の	種	子			西条八十	三一

III 評論・声明書

童話と童謡 を創作する	最初の文学的運動		鈴木三重吉	三五
赤い鳥の標榜語				三七
芸術表現としての童話			秋田雨雀	三七
童話について			島崎藤村	三〇
『鸚鵡と時計』序			西条八十	三三
童謡私観			北原白秋	三四
大震災火災記			鈴木三重吉	三四

童謡其他に對する小見	島木赤彦	三五
兒童劇の効用	坪内逍遙	三五
我が国現在の童話文学を論ず	相田隆太郎	三六
『ひろすけ童話読本』第一集序文	浜田広介	三七
童話隨筆	北村寿夫	三七
童話雜誌短評	緒方惟矩	三七
選集のはじめに		三七
子供は虐待に黙従す	小川未明	三八
夕焼草舎第一回茶話会の記	奈街三郎	三八
新興童話聯盟		三八
今後を童話作家に	小川未明	三八
解説	関英雄	三八
年表（一九一八年―一九二六年）	菅越忠信	四〇九

I
童話、小說、劇

幼おさな

きものに

(少年の読本)

島崎藤村しまざきとうそん

はしがき

とうさんが遠い外国へ出かける時、ふたりの子どもを東京に残して行きました。その時、兄の太郎は九才、弟の次郎は七才でした。

かあさんはこの子どもらのまだちいさい時分になくなりました。それでとうさんは、東京のおじさんの家うちに、ふたりの子どもをたのんでおいて行つたのです。

太郎や次郎には、まだ下に、弟と妹とがあります。おさないきょうだいはみんなで四人です。太郎が九才の時は三郎は六才、お末は四才でした。かあさんがないものですから、三郎は信州しんしゅうのおばさんの家に、お末は常陸ひたちの海岸のほうにすむ乳母うはのところになやなわれていました。とうさんが外国へ行く時には太郎と次郎とはばあやにつれられて、ステイションまでとうさんを見送ってくれました。